

## II. 学びの森の風景

# 学びの森の住人たち (9)

—学校でもない学習塾でもない、  
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—



アウラ学びの森 北村真也

### 8-2. コトバが生まれる時

#### 1. メイクの中の私

アウラの森へは、電車とバスを乗り継ぎ1時間以上かけてやってくる子どもたちも珍しくありません。現在高校1年生になるカオリもそんな遠方から通っている不登校の女子でした。

カオリが生まれ育ったのは、山間部のある集落でした。幼稚園、小学校、中学校、そして高校と、彼らの多くは同じ学校へと通っていきます。地域には、コンビニが2軒と小さなスーパーが1軒。集落内を歩けば、自ずと顔見知りの誰かに会うといったそんな生活環境の中にカオリは育ったのです。そこは、小さな社会ですから、みんなと仲良くやれている間はいいいのですが、いったんその人間関係が崩れだすと、途端に人間関係が苦しくなってしまいます。苦しくなっても、そこに逃げ場がなくなってし

まう。そんな環境が彼女を苦しめていたわけです。

「カオリが、初めてアウラにやって来たのはいつだったっけ？中3の夏だったかな？」

「夏。7月くらいから」

「じゃあ、いつから学校へ行ってなかったの？」

「中学2年。というかも中1の終わりかな？中2なる前くらいとか、そんな感じ」

「それは、どうして行かなかったの？」

「最初に学校休んだのは、朝起きる時にもすごい頭が痛くなって、それで、ほんとうに割れるように、こめかみが痛くなって、“痛い”って言ったら、お母さんに“じゃあもう今日は休んでおき”って言われて…その日から全部ダ—って崩れていって…」

「それ、もう1年の終りくらいやな？」

「1年の終りくらいに。それからもう全部がなんか、いやになって…うん」

「ああ、そうなんや」

「行かないようになった」

「そしたら、まあ最初はただ頭痛くなってということがあって…、なんかこう些細なきっかけだったわけ？」

「うん…、でもその前から学校以外はあまり家を出なかつたりして…いつもだったら私は活発だから、休みの日とかでも“どっか行こう、どっか行こう”とか、お母さんらに言ってどこかに連れてってもらってたんやけど、でもそれがもう1年生の終りくらいからお母さんらに“どっか行こうか”って言われても“行きたくない”って言うようになって…」

「どうしてなの、それは？そのあたりの話は知らないわ。どうして急にそんな風になったわけ？もともと活発やった？」

「もともと、めっちゃ活発やった！身体動かすことがめっちゃ好きやったし、外出たり、買い物はしなくてもウィンドウショッピングっていうか…お父さんがそういうの好きやから、そんなことにもちょこちょこ連れてってもらったりっていうのが、楽しかったんやけど、でもそれさえも何かどうでもよくなって…」

「どうしてなの、それは？」

「うーん…何やろう？何か全部に無気力になって。自分が好きやったネイルのこととか…、休みの日とかは爪塗って遊んだりっていうことを毎週のように

にしてたんやけど、でもそれも全くしなくなって。それで髪の毛のケアとかも…」

「それ1年の時やろ？」

「1年の終り」

「うんうん」

「それも全部しいひんようになって…」

大変活発だった女の子が急に無気力になっていく、その理由もただ頭痛がするというだけで、最初はよくわからない。わからないのに無気力になっている自分を見て、もっと無気力になってしまう。これは不登校の子どもたちに共通して起こりうる状況だと思います。

「どういうことは、もともとおしゃれやったんだ。そういう意味では、わりとおませさんだったわけや」

「そう」

「だって中学1年の女の子ってそんなことに関心のある子と、そんなこと全然なんも思っへん子と違って結構いっぱいいるんじゃない？」

「うん、いるいる。で、私らの場合やっぱ人数が少ないから…、その中で私はずっとそんなことが好きやったから…、だから私は早かったんや。メイクとかネイルとか全部早くて…」

「どうしてそれ早かったの？何かきっかけがあったん？それはおばちゃんの影響なの？」

「やっぱりテレビの影響なんかな？」

「ふんふん」

「私が好きな倅田來未っているやんか。」

小学校の3年くらいからずっと倅田來未が好きで、その倅田來未のネイルショーで爪がゴテゴテにやっているのがかっこよくて、それを見ていてかっこいいなって思って…」

「小学校3年の時に？」

「そうそう」

「へえ、なるほど」

「それで、最初ネイリストになりたいって思って…。まだ小学生やからそんなたいそうなメイク道具は買えなかったけど、おもちゃ屋さんで売っているような本当に子どもだましの3000円のキットみたいなのを誕生日に買ってもらって、一人で遊んで…」

「なるほど…。そんな女の子がそのまま中1になって…。周りの子らはそんなことにあんまり関心なかったの？中学1年の時…」

「中学1年の時は…関心はあったけど、みんな実践しようとはしなかった…」

「持ってなかったわけ、お化粧道具を？」

「そう。やっぱり中学1年生やったらお金も限られてくるし、買えるものだって少なくなってくるし…で、メイクのやり方だって、最初はみんなわからない状態やって…」

「カオリは、その時にはいろいろ持ってたわけ？」

「そんなに持ってなかったけど、でもお母さんの妹から化粧品もらったりして自分でやっていたり。それとか雑誌見て“こんなことしたら目大きくなるんや”とかを暇があったら読んでいたりとか…」

「なるほどな。そんな状況と1年の終りくらいになんか急に無気力になってきたみたいなことは何か関係があるの？」

「どうなんやろ…でもそれは多分関係ないと思う。でもやっぱり結局は学校行きたくないっていうのが頭痛いっていうことに…」

「それはやっぱり友達関係なの？」

「うーん…」

「あるいはその人間関係があまりに変化がないのがやっぱりいやとか、そんなことなの？」

「それは…どうなんやろう」

「こんな話も聞いたことあるなあ。カオリがお兄ちゃんの同級生たちと、もともと仲がよくて…。カオリが中1のときは、お兄ちゃんの中3にいてたんでしょ？」

「中3にいてた」

「で、そこはみんな結構仲良かったんだけど、それが2年になったら当然その同級生たちは卒業して学校を出てしまう。そのことは大きかったの？」

「ものすごく大きかったかもしれない」

「へえ。どういうこと、それって？」

「それは、同じ学年の子とかは、友達同士で“ものすごく仲のいい”というようなことを言っていて裏では“何なのあの人”みたいな感じの会話をしているのを見ていたから…」

「そんなのが嫌やったの」

「それが嫌で、“そんなのが嫌なんやったら最初からいやってその人に言えばいいやん”って思うんだけど…」

「でも狭い人間関係やからなあ」  
「そうそう」  
「“ああいうところ、嫌いなんやけど”  
って言うことがあるんだったら、その  
人に直接言ってあげればって思うのが  
私だったの。私は、そういう嫌なこと  
があったらもうその人にズバっと言う  
タイプやったから、基本的にそんな陰  
口をいうことはなかったんやんか。私  
自体がサバサバしているから。私は“嫌  
いや”と思った人には関わらないし、  
そんな上辺だけの人間関係は必要ない  
と思っている。でもまあ一応は仲良く  
見せなあかんけど…。それで、1年生  
の中でのそういうストレスを3年生に  
ぶつけていたの」  
「ああ、なるほどなるほど。聞いても  
らっていたわけや。それ男子？それと  
も女子？」  
「男子も女子もいる。でもやっぱり男  
子の方が多かった」  
「それを分かってくれていたわけ、彼  
らは？」  
「そう。その男子の3年生の友達とか  
やったら“だるいなあ”っていうのを  
聞いてくれていたし、クラブの中の女  
子の先輩らやったら“同い年の学年と  
いるのが嫌なんやったら、私らと一緒  
におればいいよ、面倒見てあげるから  
おいで”って言うてくれていたし…」  
「なるほど」  
「やっぱり年上やから、私が失礼なこ  
としても目をつぶってくれるところが  
あって。ちゃんと注意することはして  
くれるし、私の悪いところを気付かさ  
れる時もあるし。だから1年生の中で

たまっていたストレスっていうのを3  
年生に言ってたんやけど、でも3年生  
が卒業しちゃって私が2年生にあがっ  
ていった時にはけ口がなくなって…」  
「わかるわかる」  
「誰に話したら、よかったのかな、み  
たいな」  
「その時って、自分の本心を言っても  
ちゃんと受け止めてくれる、みたい  
な存在やったわけやろ、その3年生が…」  
「そう」  
「で、それがいなくなったわけやんか。  
だからカオリとしては辛いわけや、そ  
れが…。その時、カオリの家族って  
いうのはその代わりにはならなかつ  
た？」  
「なんか…3年生がいいひんよにな  
ったことで、私は全部シャットアウト  
しちゃったんや」  
「そのことで？」  
「うん」  
「よっぽどショックやったわけや、そ  
れが」  
「ショックっていうか、なんて言うか  
…そりゃ3年生が卒業することは当  
たり前やし、その通りなんだけど、でも  
お母さんらに話すとかいうことが全  
くなかった。お母さんに話聞いてほし  
いって思うこともなかったし…。それ  
でもうずっと一人部屋に閉じこもつ  
てずっと音楽聞いてっていう生活が、そ  
こから始まった」

幼い頃からメイクに関心を持っていたカ  
オリは、同級生たちとの間でも目立つ存在  
だったのかもしれない。いや、学校全体、

あるいは地域の中でも目立った存在だったのかもしれませんが。そんな彼女は、同級生たちとの人間関係で躓きます。そしてそのストレスを彼女は自分の2年上の兄の同級生たちにぶつけ、受け入れられていきます。でも、その先輩たちとの関係が、ますます同級生たちとの関係を悪くする方向に働き、2年生になった時、先輩たちの卒業と同時に、彼女は学校に完全に自分の居場所を失っていったのです。

「それで、アウラに来て、最初は地元  
の町が嫌やと。あの学校も嫌だし。風景も嫌だし、近所も嫌だし、何もかもが嫌だみたいなことを言っていた。とにかくカオリはそこから脱出したいみたいな、そんな話をしていたような気がするんだけど、そんな思いだったんじゃない？」

「うん」

「なんかそんな気がするんだ。それで、そんなのだったら高校は好きなところへ行ったら？って、私が言っていたように…。けど何にも勉強しないのだったらダメだし、とりあえずしっかりと勉強して力付いたら？っていうことを多分言った」

「でも、そういえば思い出した。カオリが一番最初に来た時は、確かノーメイクで来てた」

「うん」

「でも、ここに来る頃には多分メイクしないと外に出れないような状態になっていたのところがうかな」

「うん」

「あれはどうしてなの？コンプレック

スがあるわけ？」

「コンプレックスだらけ」

「そのコンプレックスっていつ頃から強くなってきたの？」

「やっぱり中学校は入ってからとかかなあ…」

「もうメイクしないと外へ出れなくなったのはいつから？」

「中学校2年生の時」

「もうメイクしないと外へ出れなくなってしまったら、学校へ行くのはつらくなるよなあ。学校はメイクしたらダメなわけだろ？」

「そう。だから学校に行く時でもファンデーション塗ってアイプチして…とかやってたんやけど、でもそれもばれて、メイク落とせって言われて…。その時は落とすふりしてたけど、学校のトイレ入って、またファンデーション塗ってアイプチして…っていうのをずっと続けていた。学校の先生に何回注意されても眉毛そることやめなかったり…」

「じゃあカオリにとってメイクってなんなの？」

「…自分を隠す手段」

「あ、そうなんや。っていうことは、みんなの前でありのままの自分を出せないっていうことか…」

「うん、そうかなあ」

「自分に自信がないわけや」

「うん、自信なんか全くない」

「だからそういう自分を隠さないといけないわけや、とりあえず。今でもそう思ってる？」

「ちょっと薄くなった」

「自信がついてきたんだろうね、きっと」

「うん」

「そうか。一番最初はノーメイクで来ていたけれど、次くらいからいきなりメイクが始まったような気もするんだけど…」

「あの時は、お母さんから“初対面からメイクしていいかわからないから、メイクやめなさい”って言われて…」

「で、私がいいって言った？」

「うん。“ノーメイク無理なんですけどいいですか？”って聞いたら、塾長が大丈夫だよって…」

「そうだったかもね。それから、アウラで一生懸命勉強していて、結構よく頑張ってたんだけど、ある日突然ぷつぷつと切れたかのように…。あれいつ位だったかなあ？一ヶ月たったくらいかなあ？」

「多分7月の半ば頃に来て、それで2週間くらいやって夏休み入って、その後も1週間くらい頑張ってたんやけど、でもそこからぷつぷつと糸が切れたようになって…」

「その頃から…。どうしてぷつぷつと切れたわけ？」

「…自分的に苦しかったりもしたのかな？」

「そうかもわからんなあ…」

「今ではそんなことなくなったけど、毎朝メイクに2時間かかるような状態やったし…」

「来るのに？そうか、メイクに2時間！なるほど…それは知らなかった。朝早く起きないといけないわけや」

「ごはんも食べないといけないし、服も着替えないといけないし、バスの時間とかも考えていたら結構早く起きないといけないし、それなら早く寝ないといけないんだけど夜が寝られないから…。だから朝起きられないようになって…。それでお母さんに“どうして起きられないのや”って責められると…。自分でもどうして起きられないのかわからないのに急かされると、また自分の中で混乱して、夜がまた寝られないようになって…それがまた繰り返して…」

カオリにとっての「メイク」は、自信のない彼女自身を隠すための術であり、表現だったのかもしれませんが。だから、メイクそのものではなく、その奥にある彼女の自信のなさが私には気になっていました。大事なことは彼女自身がその自信を取り戻すこと。それができれば、彼女のメイクは気にならなくなっていくと私は思っていました。しかし生活場面では、彼女はメイクによって幾度も躓いていきます。そしてその躓きが彼女の自信をますます失わせ、それが再びメイクに反映され、また何かで躓いていくという悪循環の構造を作り出していました。だからその循環をどう開放していくのか、そのことも私自身は意識していったのかもしれませんが。

「わかる。そういう状況やったんだ。そういう状況がずっと続いてたんや。それでまた少し来れるようになったけれど、ただめみみたいな状況が続いて、私も“もうダメかな”って一方で思い

ながらも…、私はカオリとカオリのお母さんとの関係に結構注目していたんや」

「ふーん」

「というのは、まずこの2人は、基本的に関係が深い。例えば、カオリはだいたいお母さんとは喧嘩したりとかむかついたりとかいろいろあるけれど、でもお母さんのこと結構気にしている。お母さんとも私は喋りながらいつもそんな風に思っていた。あんまりぺらぺらとよく喋る人ではないけど、カオリのことを結構思っているんやなあ、という思いがあって…。ただでも、カオリ自身はなかなか前に進めないような状況があったから、お母さんに喋ろうと…。それで、その頃お母さんと喋ったことで覚えていることが、当時お母さんともとても精神的にきつくて…、というのはお兄ちゃんのことがあった。それから自分も夜勤があったりとかで、結構不規則な状況があった。ここに来るのも当然お金がかかるし、自分ももう限界やと…。で、本当にもうどうしようもできないというようなことを、お母さんは私に訴えるわけや。まあそれは受け止めてあげないと、という思いもあったんだけど…、その時に一つ提案したことが、“いつもがみがみばかり言ってないで、たまには2人で温泉でも行ったらどうですか？”っていうことだったんや。でもそれは結局行ってなかったんやろ？」

「うん」

「でも、あの頃はいつも愚痴しか言わへん、そんな関係になってたやんか。

ちがう？だから私は、そんなのお母さんもしんどいし、2人で羽伸ばすっていうのかな、そんなことを一回やったらどうですかっていうのを提案した。お母さんからそんなこと言われてどうやった？結構びっくりしたやろ、そんな話があったら…」

「びっくりした。なんでなんやろうって思った」

「嬉しかった？」

「嬉しくなかった。困惑した。なんでなんやろうって…」

「なんでこんなこと言うんやろうって？」

「そうそう。だってお母さんずっと、“学校も行かないのだったら外に出るな”とか…、お父さんもそうやったけど、“服買ってほしい”ってお父さんに言ったら、“なんでどこも行かへんやつに服買わなあかんねん”とか言われていたりしたから…だからなんでいきなりどっか行こうって言い出したのかがわからなくて…」

「実は、私がそこに関わってたんや」

「塾長やったか！」

「でもあれからなあ、お母さんだいぶ楽にならったんや。私にしんどくてたまらないって言っていた時が多分ピークやったような気がして…。お母さんが楽になるっていうことは、カオリも楽になるんだらうなって私はどこかで思ってた。だっていつも怖い顔して…そんなことしかない母親ってどうかなって思ったから…」

「でも、本当にあの時くらいからお母さん吹っ切れはったよな。中学校行か

なくてももういいや、みたいな」

「そう、お母さんももうどうしていいか分からないような状況だったから…。だからもう強制しないでおこうと…」

「だからあれから…ちょっと雰囲気が変わってきたような気がする。お母さんがまずちょっと変わったような気もするんやけど…」



## 2. もう一つの進路

順調に滑り出したカオリのアウラでの生活ですが、突然ぷつと糸が切れたかのように、それは頓挫します。いつものカオリの行動パターンです。彼女は、突然アウラにやって来なくなったのです。たとえ来てもやる気をすっかりなくしていました。そこで、私は彼女とお母さんとの関係に目をつけていきます。結構、けんかをしているのですが、お互いに相手のことを気遣っている二人。私はお母さんの気持ちや態度が変わることで、カオリ自身に変化が生じていくことを期待していったのです。そして実際、それが大きな契機となって、カオリは再び動き始めることになりました。

「そうだった、そうだった。それで、私がカオりに結構大事なことを喋っている場面があって。それは何かというと、カオリは初めてここに来た時に、学校が悪いとか自分のところの地域が悪いとか、友達が悪いとか、だから私は行けないのだと私に言っていたけど、でもアウラに来て同じだった。そこで、それってどういうことなんだろう、って私が問い直したんや。結局は、今まで周りがどうやこうやって、周りのせいなんだっていうことを言ってきたけど、でも実はそうじゃないかもしれないと…。それにこんな話もした。カオリの一番の課題というのは何かというと、いつもある程度ストレスがかかってしまうと、いつも突然ぷつと切れてしまう。そこが変わらなかつたら、学校に行つたって、仕事をしたって同じことが繰り返されてしまう…」

「うんうん、言われた」

「それでなんて言ってたっけ？カオリの課題について…」

「“何かの根本を見つけ出さなあかん”って…」

「そういう風に言ったなあ。だから要するにカオリの中にあるパターンっていうのが、全部途中で“もういいわ”って投げ出してしまふ。だからそれは働いたってやっぱり同じことが繰り返されるし、結婚したって“もういいわ”って投げ出してしまつたら一緒だし…。だからそこがカオリの中で変わっていかなかつたら、カオリは幸せに生きれへんかもわからんっていうような話を言ったような気がする」



「されたなあ…」  
「あれいつかなあ…年末かなあ」  
「12月の頭かなあ」  
「それが12月の頭で、12月の終りのあたりで病院に行くわけや」  
「クリスマスくらい」  
「それはどうしてやったの？それは私が提案したんだっただけかな？それともお母さんがそう言ったんだっただけかな？」  
“寝られないのだったら病院行き”って、お母さんが…」  
「その時はもう私がアウラにも行かなくなった時で、来ても昼からとか…そんな感じの時。お母さんが朝送るって言っている時に、私が用意している途中でまた眠たくなってしまって…。お母さんに“もうそんなに寝られないのだったら病院行こう”って言われて…」  
「それで病院行ったの？」  
「うん。それで初めて病院行って…。病院行き始めてから、まあ順調にいつて…」  
「そうそう、それで年明けてカオリはちゃんと来れるようになり始めたんや」  
「…なり始めたんやけど、2月の下旬から3月の頭まで休んじゃった」  
「それはどうしてやった？やっぱり進路の不安みたいなのもあったんかな？これからどうしていくかとか…多分1月の頭とか全然進路決まっていなかったでしょ、まだ…」  
「うん」  
「決まっていな。 “どうしようか” っていうとずっと言っていた。進路決まったのが本当に2月の後半とか3月の頭とかとて

も遅かったから…」  
「カオリは、最初友達が行こうとしていた携帯で試験が受けられて卒業できるような通信制高校に行く、そんな話だったでしょ？」  
「うん」  
「それは、絶対だめだと思ったんや。それは、カオリにとって大事なことは携帯でどうこうとか、そういうことじゃなくて、アッコと一緒に…。カオリにとって、アッコという一つのモデルがあったことは大きかったでしょ？」  
「うん」  
「だから結局“カオリも地道に生きろ”って。私はそんなことを言ったような気がする」  
「うん」  
「“粘り強くこつこつと、それを継続できる力がカオリの自信になるんだ”っていうっていうことを…」  
「言われた、言われた！」  
「だから適当にやって高校の単位とるとか、そんなの絶対ダメだって言ったような気がする。それと、カオリの住んでいる町に私が行って一番深く思ったのが、コンビニの駐車場に行った時に“カオリはこういう世界の中で生きてたんやな”って、それをものすごく思った」

年が明けてから、私はカオリの住んでいる町へと足を運びました。彼女の視界に入ってくる風景や聞こえてくる音、そして肌に感じる空気…。彼女の生活のリアリティを私は自分で直接感じてみたかったのです。

「駐車場じゃなくて中の…」  
「フードコートみたいなところ？そうかそうか」  
「そうそう。あそこで、1時間とか2時間だらだらと、雑誌読んでいたりとか…そんなことで時間つぶしたりしていた」  
「私はその時、思ったんや。“この子はこういう世界の中で生きているんやな”って。あの時初めてわかったわ。なんかこういう…」  
「狭いなあって思ったやろ？」  
「そう思った」  
「やっぱり…」  
「あそのコンビニのところが高台みたいになってるやん」  
「うんうん」  
「下のほう、学校とか見えたのどちがったかな」  
「うん、見える見える」  
「そうや。こういうところにあるんだなあって思いながら…で、そのことのちょっと後に…雪が降った日や。カオリがバスに乗ろうと…」  
「そうや！そこからや！」  
「それであの時に…雪が降った日にカオリがビニールを足に巻いてとか言ってバスに乗れなくて…あの時に泣いて電話してきたんじゃないかなあ…」  
「うん」  
「私がすごく心痛めたのは、そんな状況でアウラに行けなくて家にいたらお母さんが“アウラも行かないのだったらもう学校行きなさい”って言われて、それで、それやったら学校へ行こ

うかなって思っただら、しばらくは保健室にいて、“その顔やったら学校でうろうろするわけにいかないし帰りなさい”って言われたんや」  
「うん、そうそう」  
「それで、でも家に帰ってもまたお母さんになんか言われるし、外は寒いし…」  
「いや、その時お母さんは仕事の遅番で、昼からもう出ていたから家にはいなかったんだけど…」  
「なんか泣いて私に電話してきたような気がするんや。“私、行く場所が無い”とか言って…」  
「ちがう、塾長が電話してきて…“大丈夫か？アウラに来ないで、何してるの”って電話してきたんや。それで“今日こんなことがあったんや”って言ったら、もう思い出して泣けてきて…」  
「あれは、それまでにカオリの住んでるところに行っているから、なんかこう…現実感があるわけや。なんか…かわいそうやなあって…」  
「それ言った！」  
「そういう風に私は思った気がする」  
「そうや…。“コンビニの駐車場は寒いし、いれないしなあ”って言って…。私、泣いているのに笑いながら言われたからなあ…」

私がカオリの住んでいる町に行ったことは、彼女にとっても何らかの意味を持ったように思います。彼女の生活世界をどこかで共有している感覚を互いに持ち始めたのかもしれませんが。実際、それまで揺れていた彼女の進路はそれ以降トントン拍子で決

まっていたのです。

「そんなこともあったような気がする。それで…そんなことがあった後に進路も決まっていた？」

「そう…」

「アウラに週2回通って、通信制高校に所属して、そして地元でアルバイトをはじめる。アウラ、通信制高校、アルバイトを三つ巴にして進路を設定するというのが、カオリの進路指導だった」

「そうそう」

「なんかそれで、アルバイトをどうにかしないといけないというので、私がアルバイト先を一生懸命リストアップして…でもああいうことをやったことでお母さんがなんか“けっこうあんたも本気やな”とかいうので、お母さんがいろいろと職場に声をかけてくれたのと違ったかな？」

「うん。“お母さん何にもしてくれへん”って言ったら、“あんたは、やるやるって言っていて口だけだということがあるから、バイトお願いしますって言っているのに結局嫌やって言って辞めたら相手に迷惑になるから、だから声をかけたり聞いてみたりっていうのは、あんたがちゃんとやるって決めてからじゃないと私は嫌やった”ってお母さんも言っていた」

「そうやそうや」

「“じゃあ声かけてくれるの”って言ったら“一回聞いてみる”って言ってくれて、お母さんが聞いてくれて、そこからもうトントン拍子でバイトにも行

けて…」

こうしてカオリは、春からもアウラへと通ってくることになりました。今度は通信制高校に在籍して、地元のスーパーでアルバイトをしながらです。そんな彼女の姿を見て、私は「ずいぶんたくましくなったなあ」と心から思っていました。私はそんなカオリに、アウラに来てからの10ヶ月を総括してもらいたいと思いました。彼女なら、この自分の変容の期間をどういう風に意味づけていくのかを知りたかったのです。

「そうやったなあ。しかも中学校卒業してから、カオリはまだ一回も休んでないし…」

「うん」

「高校のこともちゃんとやるし、アルバイトもちゃんとやるし…まあ絵に描いたようになんか…、そういうことをずっと続けると、だんだん自分に自信もついていくでしょ。お母さんに話を聞いていても、家庭も平和で…なんかよかったなあと思いつつながら。だからカオリが、7月にはじめてアウラに来て、まだ1年経ってない。10ヶ月くらい…」

「経ってないけどめっちゃ長かった！」

「この変化っていうのはやっぱり大きのかなあと思うんだけどなあ」

「うん」

「カオリの中でこの10ヶ月くらいの変化っていうのはどういう変化やった？」

「えー…何が？」

「この10ヶ月の間にずいぶん変化し

たでしょ？」

「めっちゃ変わった、と思う」

「その変化っていうのはどういう変化なの？カオリなりにコトバにしたら…」

「やっぱり気持ち的には全然変わってる」

「どんな風に変わってるの？」

「まず、メイクしないと外へ出られないというのがちょっとは治ったやろ？そんなバシバシのつけまつげして、めっちゃ濃いわけではないやん。そんなことがなくなったし…だいたい、昔より自分のこと好きになれている感じ」

「なるほど」

「それとか、1年生とか2年生の時とかの過去を振り返りたくないとか思ってたけれど、今ではそれもいい経験やっとなって思えるようにもなったし…」

「すごい」

「私が生きていく上でそれが必要やったんかな、とかって思えるし、ちょっと自分に余裕が出来てるから…」

「ふうん。すごいよね、なんかね。私なんか、カオリの薬はまだしばらくいるのかなって一方では思ってたんや。そう言ってたでしょ。だからカオリにとっては、一つはここ、通信制高校に在籍していて、それからアルバイトやって、それから病院も行って、それで、それ全体を私たちが見届けるということいいかなあ、っていう風に思ってたんだけど。病院はもう…薬は飲まなくてもやれるし、すごいものやなあとか思いながら…。だからアウラの存在っ

て大きかったよね」

「大きかった」

「どういう存在なの、アウラって」

「アウラ？アウラっていうか…塾長が大きかった」

「大きかった！どういうことなの、それは…」

「なんか…どんな私でも受け止めてくれるような…」

「そうなんだ。私の存在は大きかったわけ、カオリにとっては？」

「うん、大きかった」

「それはあの…中学1年生の時のお兄ちゃんと同級生たちと似たような感じがするの？」

「似てないよ」

「それは違うの？どんな風に違うの？」

「お兄ちゃんと同級生と似ているってことは全く無い」

「でも彼らも、カオリがどうであっても受け止めてもらえるみたいに言ってたでしょ？」

「ああ。でもなあ、…塾長は、全部を見せて私に言ってくれる。お母さんのこととか、学校のこととか、まあ全部いろんなことを考えて私に言ってくれるやんか。でもその先輩らは、その時に“はいはい”って聞いてくれるような…」

「その時だけだということ？」

「聞いてくれているけど、ほんまにお兄ちゃんみたいな感じの存在やから…。塾長みたいな感じではなかった」

「そうか」

「よしよし、とはしてくれるけどめっ

ちゃ周りのこと見れている、っていう感じではなかったし…」

「じゃあ、そういう意味では、“私のことわかれてるなあ”っていう感じがあったの？」

「うん、うん。“カオリは今こんな状態やで”って言ってくれたのも塾長やし。

“学校行けないことに落ち込んで、またそれで学校行けなくなって…っていうのがカオリのサイクルなんやで”、って私に言ってくれたのも塾長やったし…。お母さんも分かってなかった。もう何でなんやろうってずっと言ってはったから…」

彼女の話の聞いていると、アウラ＝塾長、そんな図式が浮かび上がってきます。彼女にとっては、自分の生活世界にわざわざ足を踏み入れ、自分のつらかった気持ちを共有してくれた塾長、つまり私が大きな存在となり、またそれを媒介としながら、自分自身を変容させていったのかもしれない。

「うん、なるほどなあ。なんか一連の話の聞いていくと…よかったねえ、なんかねえ。そう思うわ。だからまあ、人生って無駄がないよなと思うな」

「深い話やなあ」

「私も本当にそう思うんだ。アッコとかにもよく言っていたけど、不登校になる必要性っていうのかな…そうやって自分が傷ついていけなくちゃいけない必要性っていうのかな、そんなのがある。カオリもさっき言ったように昔はそういう傷ついたものは消したかった？」

「うん」

「でもそうじゃなくて、やっぱり傷ついていく経験だって人生に必要な1コマなのかもしれないし、そういうのがないとわからないっていうか…」

「早い段階で知ってよかったなと思う。人を信じすぎるのがあかんっていうか…」

「どういうこと、人を信じすぎるって？」

「だから人を信じすぎて傷ついたから、だから全部が全部信じられる人じゃないんだということがわかるっていうか…」

「こんな風にもう1時間くらい…カオリは語った。私もこうしていろいろ質問しながらけど…。どう、こういう時間って、喋ってみてどう？改めてなんか気付けるっていうのか…」

「思い出すよな。思い出話になったからよかった！」

「その通りやと思うね」

「“こんなことあった！”って今ではもう笑っていえるけど…」

「人間ってそうなのよね。自分がまさに辛い時って思い出すことも拒否してしまうっていうのか…。でも、やっぱりそれで自分が辛い状況から脱出した時に、“自分はこうやった”とか、“あの時に辛い思いしてそのことが今となってはすごく大事だった”とか、そんなことがわかる自分は、結構幸せな状態にあるんじゃないかなっていう気がするんだよね」

「うん」

「だからこういうことを語ることで自分の幸せっていうか、今の充実感みたいなものを実感してほしいっていう思いもあるね」

「うんうん」

「で、私は人が変わるっていうのに興味があるわけなんだ。だから“私なんか生まれてこなかったらよかった”とか、さっき言っていたみたいに自分を否定している時ってそうなんだ。“私なんて生きていても意味がない”とかさ、結構それに近いような状態ってあったでしょ、きっと…」

「うん。何回も死のうと思った」

「でもそうじゃなくて、そういう自分の価値っていうのかな、そういうのをもう一回それぞれの人が見出してもらえたらいいなあって。そういうのにやっぱり関わりたいなっていう思いがあるのかなあ。まあでもよかったよね。とりあえずしばらくこの状態でいって、お金もちょっと貯め始めて、まあでもやっぱりこれから将来どういう風にしていくのかとか、なんかいろんなこと考えていかないといけないように思うよね」

こうして私のカオリへのインタビューは終わりました。私がこのインタビューを通して見たものは、彼女が語る物語とそれに裏付けられている彼女の変容でした。「物語」と「変容」との間には大きな関係があります。そういう意味では、多くの不登校の子どもたちは、最初コトバを持っていないのかもしれませんが、カオリの場合も、それは「メイクをする」という行動で表現さ

れていました。その背景にあった劣等感、孤独感、あるいは閉塞感を彼女はメイクという行為の中で表現しようとしていたのかもしれませんが。だから私たちのカオリへの関わりは、その背景にあった彼女の感情を共有することから始まったのです。そしてやがて、彼女はコトバを持ち始め自分自身の物語を語り始め、大きく自分の進路を切り拓いていったのです。



### 3. それぞれの物語

「ボクは、病人として生きていたいわけじゃない」ドクターからストレスのあまりかからない生活を奨められ、そう語ることで受験生への道を歩み始めるようになっていったタクヤ。彼はその後、ドクターに自ら薬を止める宣言をし、受験を突破してきました。

「ひきこもりは、3年すれば飽きる」と笑いながら話してくれたキヨシ。彼は自らひきこもった苦しみの塊のような3年間でそんなコトバで表現しました。

「2年前の私に、あんたの2年後はこん

な風になってるんやと言ってやりたい」と力強く語ってくれたユキエ。彼女は、過去の自分に別れを告げ、新しい自分自身を再出発させようと宣言したのかもしれませんが。

そして「私、行く場所がない」と泣きながら自分の心の奥底にあった感情を伝えてくれたカオリ。彼女はそのどうしようもない辛さをメイクというカタチで表現しようとしていたのかもしれませんが。

こんな風にアウラの森の不登校の子どもたちは、どこかの段階で自分たちのコトバを持ち始めます。それまでは、なぜ自分が苦しいのか、なぜ不安なのか、なぜ身体が辛いのか、それらはわからないままだったのです。しかし彼らがコトバを持ち始め、自分たちの物語を少しずつ語り始めた時、彼らはその思いを誰かと共有し始めるのです。でも最初から、そうなるわけではありません。コトバが生まれるためには、いくつもの段階があるように思います。そのステップを彼らは一つずつ、時には後戻りしながらも上っていくのです。

また子どもたちの物語が、同時に家族の物語を生み出すこともよくあります。不登校という出来事は、家族にとっては大きな課題としてのしかかってきます。子どもが不登校となったがために、夫婦の関係が揺らぎ始めてしまうこともよくあります。夫は妻の子育ての仕方を批判し、妻は夫の無関心さを批判するのです。実際こうしたことで家族がバラバラになっていったケースも私たちは身近に見てきました。

しかし、その一方で子どもが不登校になったことで、家族の絆が強くなり、この困難を家族全体で乗り越えたケースも目にしてきました。「この子が不登校になったおかげで、ようやく私自身が親になれた気がします」そう話される親御さんも結構おられます。不登校という問題を契機に、家族自体がそれぞれを見つめ直し、新しい家族として再出発していけることは何よりうれしいことなのです。

不登校の子どもたちが傷つき、ボロボロになった状態から再び歩き始めるようになる時、その再出発のタイミングにコトバはとても重要な役割を果たします。かつて P. フレイレが記した『被抑圧者の教育学』の中に出てくる対話としての教育のように、コトバを媒介としながら彼らは自分たちの辛い過去を相対化し、そこに新たな意味を見いだすのです。もちろんその際に先生や仲間たちとの関係が大きな励ましとなることは言うまでもありません。

そしてコトバは、やがて彼らの人生の物語としてより大きな意味を持ち始めます。アウラの森での経験が、その後の彼らの人生の中に活かされる時がやってくるのかもしれませんが。成功体験の蓄積は、その後の行動に大きな影響をもたらすからです。また物語は、第三者にも感動をもたらします。子どもたちの変容が、家族の変容を促し、仲間たちの変容を促すのはそのためです。そして彼らの周りの変容は、再びその子の変容を促すのです。そこには物語を媒介にした再帰的な循環構造が出現し、アウラの森は、そんな循環を意図的に実現させる仕

掛けとなり得るのです。

毎年、年度末にはアウラの森の卒業式があります。今年も4名の不登校の子どもたちがアウラの森を巣立っていきました。それは手作りの卒業式でしたが、子どもたちも、そして私たちも涙の式となりました。みんな最初はつらく記憶からも消し去りたいような状態から始まりました。でも、今、本当に別人のようになって今日の日を迎えることができたのです。

ある卒業生の一人が式の中の答辞で、こんなことを語ってくれました。

「私は、今まで自分が何かにつまずくと、誰かのせいにしたり、何かのせいにしたりしていました。でもここに来て、先生たちと出会い、みんなと出会うことで、少しずつ勇気をもらい、ようやく自分自身と向き合うことができるようになったと思います。そして、少しずつ強くなれたように思います」

それは、力強いコトバでした。記憶から消し去りたいと思っていた不登校の記憶が、彼らにとってなくてはならない経験に置き換えられるとき、私たちの仕事も終わるんだなと感じた瞬間がそこにありました。